

られ、「飛ぶ鳥をも落とす」といはれし勢威は、一場の夢と化し去りぬ。田沼が悪政の後を承けて、白河の城主松平定信は、心を盡して十一代將軍家齊を輔佐し、所謂寛政の治、美を享保の治に比するに至り、天下の面目再び一新せり。

寛政五年、定信は職を辭しけるが、矩子はこの年始めて近衛家に仕へたり。時に年八歳なりき。

彼が勤王の事に與れる生涯はここに始まれり。正に是れ、千古の卓見を以て海防の説を立てたる憂國家林子平が仙臺の幽居に病死し、高山彦九郎が九州にて自殺したるとも同年なり。

矩子が仕へたる近衛家は藤原忠通の長子基實に出で、九條、二條、一條、鷹司の四家と共に五攝家と稱せられ、攝政關白に登るの特權を有し、朝臣中の最も重要な位地を占めたり、近衛家の當

時の主公は基前といひしが文政三年、年三十八歳にして、早く薨せられき。

近衛基前の薨前十二年、即ち文化五年に子忠熙公誕生ありて、ここに至りて、後を嗣がれぬ。忠熙公誕生の頃は、矩子が該家に事へたるより十五年を経たれば、忠熙公の保育輔導につきて、矩子が與れることは少なからざりしならん。矩子は、

事理にさとく、雄健の氣象さへありしが、温良謙讓の美德を具へ、つゆほこりたるさまなく、事處するに縝密にして、同家の上下のものに厚く尊敬せられきといへば、尤もかかる任務に適當せる人といふべし。

ヴァクトリヤ女皇傳(つづ)

鄭越生補譯

兎も角もキリアム四世の即位によりて、女皇は

頗る皇位に近き身分とはなつて来たが、まだ全く定まつたと云ふわけには行かぬ、なぜなれば皇后アデレードはまだ壯齡のであるから是から後御慶事が無いとも限らぬ、若し御慶事があつたとすればその皇子が皇位を繼承するのは當然たることであるから、

然るに女皇はだん／＼御成人なさる、年は追々に女皇のために都合よく回轉すると云ふわけで、一千八百三十七年六月二十日キリアム四世はとう／＼皇子なくして崩御せられたので……我が亡き後は姪ヴィクトリアをして王位を繼がしめんとこの遺勅を賜はりて……女皇には十八歳の妙齡を以て踐祚せられ、其の翌一千八百三十八年六月二十八日エストミンスター寺に於て即位の大禮を擧ぐることになつた、

この時の倫敦の賑ひといふものは實に非常なもので、前代未聞の盛典であつたといふことで、時の新聞紙や雜誌なども皆異口同音に紙にも筆にも言ひ表はすことはできぬ、言語以上の、文字以上の賑ひであるといつてあるが、左様であらう、在朝黨といはず在野黨といはず、上は王家の高貴より下は樵夫海女の微に至るまで、誰一人ウィクトリアと稱せらるゝ極めて可愛らしき少女の即位には反情を表したものは無い、殊に歴史上現王統に對して不満を抱いて居る一派の貴族があつて、王位繼承の起るごとに何に彼と異議を申し出し、又申し出でぬまでも多少の風説を引きかこして一般人心に疑懼不安の念を抱かしむる傾向が、毎時ありがちであつたが、此の度に限りては此等の貴族さへブツツリとも云はぬ、従つて何の風評も起り

得なかつた、何にしても是れまでの帝王中國人一般の満足を得て即位せられたること此の少女帝の如く盛なりしは殆んど無かつたのであるから、その即位式が歴史以來の盛大であつたのも無理はないのである、

六月二十六日……まだ定日より二日も前である……二十六日にさへ、流石世界の大都と云はる、倫敦も殆んど一錐を立つる餘地の無いまでに人を以て充された、翌くる二十七日となつては何百万何千万と倫敦目がけて押し寄せ来る老若男女に通輦の道筋に當る道路にはレールの上も何も一面、市内鐵車の運轉さへも停止するの止むを得ざるに至つたと書いてある、

いよ／＼二十八日となつた、天氣も至極麗かである、午前十時八頭の驢馬は鳳輦を牽き儀仗整々

としてバツキングム城を練り出した、國民歡呼の聲は天に轟いた、何れも少女帝の万歳を祝せんと、潮の如き人波に鳳輦はしば／＼停止した、女帝は親しく國民狂喜の状を見そなはせられて玉顏殊に麗はしく十一時エストミンスター寺に到着せられた、やがて宣誓式もすみ戴冠式もすんで、即位の大禮も無事に終りを告げた、ヴィクトリヤ女皇万歳、大英國万歳、といふ聲の中に、

越えて一千八百四十年二月十日二十一歳の少女帝は、その從兄に當らせらるゝアルバート親王と大婚の式を挙げられた、親王はサククス、ブルグ、ゴタ侯の第二子である、之れより先き一千八百三十六年女皇十七歳御誕辰の祝節に、親王はケンシントン城に上りて女皇に會見したことがあつたが、その時親王の奉つた指輪は、以來女皇の第一

貴重物であつた、常に女皇の左手の第三指に閃いて居つたが、とうとう女皇の配偶者となつたのである、

これより關雎の御睦み最とめでたく、皇室いよ／＼榮昌に赴いた、試みに皇子方の御生誕に付て記し奉れば、

ヴィクトリヤ内親王

降誕 一千八百四十年十一月二十一日
獨逸帝フリードリッヒ一世に嫁す

エトワード七世

誕 一千八百四十一年十一月九日降
丁抹國王クリスチヤン十世の長女アレキサンドラ内親王を娶る英國の現帝なり

アルフレット親王

露西亞帝アレキサンダー二世の女マリイと婚す
エザンホロー公たり

ヘレナ内親王

降誕 一千八百四十六年五月二十五日
シコレスウイッヒ、ホレスタインのクリスチアン親王に嫁す

ルイズ内親王

誕 一千八百四十八年三月十八日降
ロイン公に嫁す

アウザー親王

一千八百五十年五月一日降誕
普西亞のルイズ内親王を娶る
コンノート公たり

ビートリス内親王

誕 一千八百五十七年四月十四日降
ヘッセのヘンリー親王に嫁す

女皇即位以來英國の國勢の進んだことは殊に著しいもので、御即位の時と女皇即位六十年祝典の時の英國は、まるで別の國である、生れ代つたやうであると、その祝典の時に頌した人があつたが、まことに其の進歩は烈しいものであつた、が、今こゝには女皇の政事上に於ける御功績は一切述べぬとせよう、「婦人と兒ども」と云ふ雜誌であるから、これで女皇の傳記は一先づ終りました、また面白き事やら必要なることは何れ述べるまでも、兎も角筆を擱くことにせよう

(完結)